令和４年度　江戸川区立上一色中学校　学校関係者評価　最終評価用報告書

学校教育目標	一　自ら学ぶ生徒 一　心身を鍛える生徒 一　社会をつくる生徒	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・保護者、地域と連携し、信頼され豊かな教育活動を展開する学校 ・自律し、国家・社会の一員としての自覚と貢献する気持ちをもった生徒 ・熱意をもって職務に専念し、確実な学力に向け豊かな教育活動を展開する教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞①学力向上に向け、ICT機器を利用し、対話的な授業への取組が増加した。 ②道徳教育については、議論する道徳授業が定着してきた。 ＜課題＞①学力向上に向けての取組を充実させる。 ②特別支援教育の充実を目指す。 ③読書科で学校図書館の活用による探究学習の充実を目指す。		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		来年度に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・「確かな学力向上推進プラン」の実施や補習の実施などによる指導の充実と授業力の向上	・研究授業、協議会での主体的・対話的で深い学びの研修を行う。 ・放課後補習授業を計画的に実施し、数学の基礎力の向上を図る。	・生徒が、生活アンケートで授業がわかる、達成感の感じられるという肯定的な回答を8割以上得る。 ・補習授業を行う数学の下位層の底上げを図る。	B	B	・生活アンケートでは、授業がわかると答えた生徒が8割を超えていた。 ・放課後補習授業の下位層の定期考査での点数が向上していないので、引続き、底上げを図るようにする。	B	生徒が学校にきた、内容がわかる授業を取り組んでほしい。補習授業を活用し、多くの生徒が参加できるように促してほしい。	生徒がわかる授業を目指し、さらに研修を積み重ね、授業力を高める創意工夫をしていきたい。
	体力の向上	・体育の授業や休み時間における主体的な運動の実施による運動意欲の向上	・体育授業前の上中トレ−ニング（5分）を実施する。	・体育授業前の上中トレ−ニングを毎時間実施する。	A	A	・体育の授業前のトレーニングメニューを工夫し、毎時間実施している。	A	文武（部）両道を行えるように、引続き、運動にも力を入れてほしい。部活動も活発に行ってほしい。	体育の授業だけではなく、部活動の加入者を増やしたい。体育の授業でも、トレーニング内容の厳選を行う。
	読書科の更なる充実	・学校図書館の整備・活用の推進や探究的な学習の充実 ・読書科ノートの活用など、探究活動、探究的な学びの充実 ・学校図書館を使った授業の充実	・読書科の成果物作成と、計画的な読書科の取組を行う。特に探究的な学習の良さを理解させ、問題を解決してふさわしい発表を経験させる。	・3年生は3年間の集大成、卒業研究を完成させ、文化祭で展示する。 ・1・2年生は学校図書館での調べ学習を2回以上実施する。	B	A	・3年生の卒業研究は、年間計画の後半で行い、工夫をした発表・成果物ができた。 ・1年生は校外学習、2年生は、林間学校、3年生は修学旅行で学校図書館を活用した。 ・1・2年生はキャリア教育の一環として、職	A	文化祭や学校公開を通じて、生徒の作品を見れることを楽しみにしている。入学式、卒業式などの式典も参加できるようになることを期待している。学校図書館が整備され、きれいになった。今後も維持をしてほしい。	学校図書館を様々な場面で活用する。教科や特別活動、総合的な学習の時間でも活用を増やしていく。
特別支援教育の推進	共生社会の実現に向けた教育の推進	・エンカレッジルームの活用促進 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・副籍交流、交流及び共同学習の充実	・エンカレッジルームの活用、ステップサポーターを活用し、毎日支援できる体制を整える。 ・副籍では、直接交流や間接交流を行い、共生社会の理解を深める。	・エンカレッジルームの柔軟な活用を行い、毎日の支援体制を実施する。 ・副籍交流では、鹿本学園との関りを通して、年間3回以上の交流を実施する。	B	B	・エンカレッジルームを活用し、毎日の支援を実施することができた。不登校の生徒が教室で授業を受けることができた。 ・副籍交流で、鹿本学園と意見交換をしながら、交流を実施した。	B	不登校の生徒が多くなっているが、様々な手段を講じて、人数が減っているので、学校の取り組みの成果がでている。学校と家庭との協力が説明でわかった。	エンカレッジルームでの支援体制だけではなく、学年の教員の家庭訪問や保護者との面談を通じて支援を行っていく。
	特別支援教育の推進	校内委員会の活性化を図ることによる指導・支援の充実	・特別支援コーディネーターや特別支援教室専門員が中心に情報共有や共通理解を図り、全校体制で組織的な対応ができるように整える。	・特別支援校内委員会を2か月に1回以上行い、組織的に対応ができるように、支援体制を実施する。	B	B	・特別支援校内委員会を2学期以降に5回行った。組織的に対応できるように情報共有を図った。	B	情報共有を行い、定期的に、特別校内委員会を開催してほしい。	予定通り定期的に特別支援校内委員会を開催していき、組織的に対応していく。
学校と家庭、地域、関係機関との連携強化	学校関係者評価の充実	・学校関係者評価の実施と結果の公表 ・学校・学年通信とHPの充実	・地域、家庭に定期的にHPや連絡メールで通知する。	HPの更新は週1回以上行う。	B	B	・HPの更新を増やすことはできた。週1回以上とはいかず、週により偏りができた。	B	HPの更新の頻度が増えた。これからも学校の様子をわかりやすく告知してほしい。地域や保護者に対するアンケートもわかりやすい内容であった。	担当者だけではなく、多くの教員がHPを更新できるようにしていく。
	保護者との信頼関係の構築	・学校と家庭が共通理解して協力して生徒を育成	・三者面談で三者が納得できる面談の実施を年2回行う。	満足度について保護者アンケートで肯定的な回答を8割以上得る。	C	B	・保護者アンケートを行い、保護者や地域の声を聞いた。学校に対する肯定的な意見が8割以上あった。	C	保護者や地域からは、学校に対して肯定的な意見が多い。今後もと同様に信頼関係を築いてください。	保護者アンケートを前に学校だよりやtetoru、HPで学校の様子を知ってもらい、学年や担任との信頼関係を今まで以上に築いていく。
	健全育成に向けた取組の強化	・いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組の充実	・学校生活全体でいじめの未然防止。個に応じた対応を行う。いじめ防止基本法に基づき職員全体で共通理解を図る。	・アンケートを各学期実施していじめの早期発見に取り組む。組織的解決を目指す。 ・ハイパーQUを年2回行い、学級や学年で活用する。	A	A	・学校生活アンケートを実施し、早期発見、未然防止に努めることができた。 ・ハイパーQUを2回行い、学級・学年経営に活用することができた。	A	いじめが起こらないように注意してほしい。生徒同士の人間関係をしっかりと見てほしい。	QUを活用しながら、学級経営に生かし、生徒同士の関係性をしっかりと構築していく。
特色ある教育の展開	小中連携教育の推進	・「小中連携教育構想」及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・「小中連携教育構想」に基づく取組の実施。感染状況を踏まえて取り組む。	・児童の部活動交流　教科・領域別連携プログラムの実施8割。 ・生徒会が小学校に中学校紹介を年1回行う。	C	C	・小中連携がコロナの影響により、行うことができなかった。	C	コロナ禍により、制限があるのは仕方ない。校長の方針通り、教育活動を止めないようにしてほしい。	コロナ禍でも小中連携ができるような事を考え、小学校と共通理解を図っていく。
	道徳教育の推進	・自分の考えをもち議論する道徳授業 ・いじめ防止基本法に基づく授業を実施	・道徳授業の研究授業を各学年、年1回取り組む。	・「いじめ防止」に向けた授業を年1回実施する。	B	B	・特別の教科　道徳では、いじめ防止に向けた授業だけではなく、身近な話題や生命、社会生活などを題材に取り組むことができた。	B	先生方も、予防策を取り、しっかりと取り組みを行っていることがわかった。	いじめ問題だけではなく、心の教育の醸成を図っていく。